

飲酒と県民性

—— 文化人類学的考察 ——

富山市民病院神経科精神科 草野 亮

1. はじめに

洋の東西をとわず、人間がこれまでに発明したものの中で、人生に幸福感を与えてきたという点で、酒にまさるものはないといわれる。¹⁾

先史時代に、人類は果実の貯蔵中、偶然に醸酵した自然の酒の味を知った。知恵あるホモ・サピエンスは、その酒を製造することを発明した。わが国では、今から約2000年前の弥生時代に、米からお酒をつくることを発見したのであった。²⁾ そのころ、人々は集落をつくって定着し、稲作農耕を中心としたはなやかな農耕文化をつくっていた頃であった。そのような農耕生活は自然条件に左右されることが多く、干ばつや洪水などの天災は、荒ぶる神の仕業だと考えられていた。人々は、お神酒をつくり、それを神に供えて、荒ぶる神の気持を鎮めた。人々は、神々の前で陽気に飲み、かつ踊り、神をなぐさめたが、それが祭りの起源となった。

お神酒として登場した日本の酒は、時代とともに、慶祝のしるしや、人々の結束や、親交をはかたりすることに用いられるようになった。ときには、志気を強めるために用いられた時代もあった。近代では、われわれの日常生活に密接なものとなり、社交上の手だてとしても重視されるようになっていく。³⁾

現代のように、人間の生活において、価値観が多様化し、複雑な社会がストレスや緊張感を増大し、種々の洋酒の導入や、生活様式の洋風化や多様化など、いろいろのファクターから、わが国の飲酒行動は次第に変化して

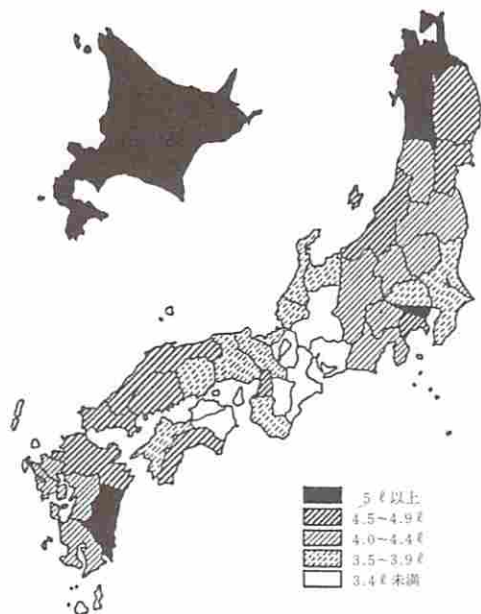
きている。

そこで、比較的日本的伝統の温存されているわが富山県の場合について、文化人類学的に考えることも意義のあることであろう。筆者らがこれまでに報告した統計的資料をもとに、³⁾⁴⁾⁵⁾ 飲酒行動を歴史の中の一断面でとらえ、県民性とのかかわりのなかで考察していきたい。

2. 日本列島を縦断

わが国の地域による飲酒量を調査した額田⁶⁾⁷⁾によると、日本列島の北端と南端の両極に飲酒量が多く、また裏日本は表日本よりも比較的多い傾向があるという。その様子を図1に

図1 ひとりあたりの飲酒量の分布



しめしている。飲酒の量を左右する因子は、いろいろな意味で、「豊かさ」と関係があるといわれている。それは、経済的な豊かさのみならず、自然条件や、教育・文化・娯楽などの社会的な豊かさや、生活上のストレスの少ないことやゆとりなどの心理的豊かさも含まれる広い範囲の豊かさである。そのようなことを念頭において日本列島を眺めると興味がつきない。

佐藤によれば、アルコール類の消費量を、都道府県別に多い方から順位をつけると、富山県は第31位であるので、その消費量はそんなに多い方ではないといえる。しかし、清酒、合成清酒、焼酎、ビール、ウイスキー(ブランデー)の5種類のアルコール類のうち、清酒に注目すると、その消費量は全国の中で第13位に浮上する。参考までに第1位から順に並べると、秋田、山形、島根、新潟、鳥取、高知、佐賀、福島、岩手、長野、青森、宮城の各県で、その次に富山県が位置する。また、この5種類のアルコール類のうちで、清酒のしめる割合に注目すると、富山県は68.8%という高率で、実に全国第3位の高さである。ちなみに、1位は佐賀、2位は山形であった。

この清酒を嗜好する傾向は、東北地方や裏日本気候区に属する地方に多い。日照時間が短く、冬が長く、寒くて、積雪量が多い。そこは日本の代表的な米作地帯でもある。生活習慣では、日本的伝統がなお温存されて残っている地方である。

第2次大戦後の社会変化と、高度経済成長の波は、わが国の都市や農村をとわず、生活文化の多様化や洋式化の傾向をすすめてきた。その影響は、飲酒行動面での変化をももたらした。すなわち、飲酒状況の多様化や洋酒化の傾向である。しかし、先に述べた東北地方や裏日本に属する地域では、その変化の速度が遅く、いまだに清酒を中心とする飲酒文化が存続している。そのことは、ある意味では、保守性あるいは後進性という地域特性を、飲酒形態をかりて表現されているのかもしれない

い。ちなみに、保守性の強いといわれる高年令層や農村には清酒嗜好の傾向がみられ、若年者層や都会では飲用アルコール類の多様化や洋酒化傾向がみられるという報告がある。

佐藤は、飲酒パターンによって、都道府県を8つの類型に分けた。その分類の方法は、

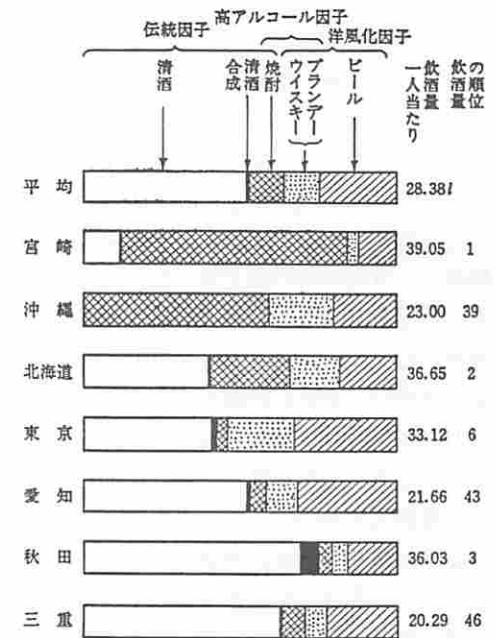


図2のごとく、清酒、合成清酒、焼酎の伝統因子と、ビール、ウイスキー、ブランデーなどの洋風化因子と、それに焼酎、ウイスキー、ブランデーなどの高アルコール因子の3因子によって分類したものである。たとえば、東京型では洋風化因子のしめる割合が高く、秋田のような農村型では伝統因子のしめる割合が非常に高い。富山県は表1のごとく秋田県型に属する。この型に属しているのは、東北6県と裏日本といわれる多くの県である。その地方は、わが国の代表的な米作地帯であり、地酒の製造が古くから行われていた。気候は、概して寒く、湿潤で、冬が長い。気象学的には裏日本気候区といわれる地域である(図3)。

表1 飲酒パターンによる府県の種類

(宮崎県型)	宮崎, 大分, 鹿児島, 熊本
(北海道型)	北海道
(秋田県型)	秋田, 高知, 青森, 島根, 岩手, 新潟, 鳥取, 山形, 福島, 宮城, 山梨, 長野, 佐賀, 栃木, 群馬, 茨城, 富山, 福井, 石川, 滋賀
(東京都型)	東京, 大阪, 神奈川
(愛知県型)	愛知, 兵庫, 京都
(三重県型)	三重, 和歌山, 徳島, 岐阜, 奈良
(沖縄県型)	沖縄
(平均型)	山口, 福岡, 広島, 長崎, 静岡, 愛媛, 岡山, 千葉, 埼玉, 香川

(佐藤)

図3 鈴木による日本の気候区分(鈴木, 1966)

(ハッチの部分は多雨区, 白い部分は少雨区)



3. 富山県の自然条件と人口動態

富山県は裏日本気候区のはほぼ中央に位置している。富山県の自然条件を統計資料からみると、表2のごとく、植生自然度は全国第3位の高さである。それは都市化や開発化とは逆の方向の指標でもある。日照時間は全国42位と、下から6番目に短い。年間降水量は全国第4位の多さであり、年間雪日数は全国10位の高さである。この富山県の自然条件は、多飲酒の条件や清酒嗜好の条件に非常によく合致している。

さらに、人口動態をみると、表3のごとく

表2

〈自然条件〉		全国順位	指標値	全国値	年
植生自然度	%	3	30.9	22.8	50
日照時間(年間)	時間	42	1979.3	2226.5	53
降水量(年間)	mm	4	2004.5	1212.5	53
雪日数(年間)	日	10	64.0	-	53

表3

〈人口動態〉		全国順位	指標値	全国値	年
出生率(人口1000人当)	人	40	13.1	14.2	54
死亡率(人口1000人当)	人	24	6.8	6.0	54
人口増加率(人口1000人当)	%	38	2.3	-	56
婚姻件数(人口1万人当)	件	46	56.3	-	56
20歳代人口	%	42	12.1	14.4	55
老人健診受診率	%	1	40.5	22.3	53

富山県の出生率は全国第40位で、下から8番目に低い。一方、死亡率は全国24位と高い。その結果、人口増加率は38位で全国の中でも下位にある。人口増加に間接的に関与する婚姻件数をもみても、46位で最下位に近い。出生率と死亡率の、このアンバランスは、やがて人口の老令化を招く。20才代人口をみると、全国42位という下から6番目の低さで、すでにそのきざしがみられている。一方、老人健診の受診率は全国第1位で、老人は健康に留意をするから長生きをして、富山県はますます老人王国となっていくであろう。清酒嗜好率全国第1位となる日もそう遠くはないであろう。

4. 県民の飲酒行動と封建制の名残り

筆者らが、先に報告した県内の飲酒実態調査で得られたデータにもとづいて考えてみよう。

初飲年令を全国平均と比較してみると、表4のごとくである。男性に注目すると、15歳以下と16~17歳の低年令では、全国平均より有意に高く、22歳以上の成人では逆に軒なみに低い。女性でも、18~19歳の未成年では全国平均より高く、22歳以上では低い。それ

表4 初飲年齢

	男		女	
	富山	全国	富山	全国
15歳以下	10.4**	3.1	4.1	3.3
16～17歳	10.7**	5.6	4.1	3.8
18～19歳	31.2	25.4	35.7**	14.9
20～21歳	36.8	35.6	37.8	27.1
22～23歳	3.7**	9.1	4.7**	8.1
24～25歳	5.2**	8.8	6.1**	9.2
26～27歳	0.5**	2.3	0.7**	2.7
28歳以上	1.5**	1.4	6.8	3.7

** P<0.1

はどのような理由からであろうか。舎人によ¹¹⁾ると、富山県は日本的伝統尊重度は全国のなかで上位から第8位の高さにあり、信仰度は第5位でさらに高い。そのような富山県は、冠婚葬祭が盛んである。その席では、老若男女を問わず、神聖なお神酒をいただくことになる。このようにして、子ども達は、他の地域よりも早く、酒の洗礼を受ける。しかし、この表の男性と女性のスター・マークの違い、すなわち男では全国より著しく低年齢の初飲経験者が多いのに比し、女の低年齢の飲酒は抑えられているという事実は、重要な意味をもつであろう。

NHKの意識調査によ¹²⁾ると、「男女の間に能力差あり」と答えたものが、富山県では表5のごとく県民の51.0%であり、全国平均の39.8%よりもはるかに多く、全国1であった。

表5

〈男女差〉				
	全国順位	指標値	全国値	年
男女の能力差あり%	1	51.0	39.8	53
離婚率(人口1000人当)%	40	0.90	1.17	54

また、第二次大戦後、年々離婚率が高くなっているのは、女性の力が強くなったからといわれているが、わが富山県の離婚率は全国第40位と非常に低い。このように考えてくると、私どもの平常の生活のなかでは意識されていなくても、男尊女卑の傾向が、なお存続して

いて、はからずもこの初飲年齢の差というかたちで表われているのではなかろうか。ちなみに、表4の全国平均の値を、17歳以下の男女の間で比較するとあまり差がみられない。

表6 飲酒のきっかけ

	男		女	
	富山	全国	富山	全国
つきあい	42.3**	61.8	37.6**	46.7
行事・お祝い	32.4**	10.8	44.8**	30.7
何となく	9.9	6.5	8.1*	11.8
仕事上	7.1**	1.8	6.0**	2.4
一人前になったので	3.8**	1.8	0.9	—
親のすすめ	1.9	1.0	0.9	2.7

* P<.05

** P<.01

最初の飲酒のきっかけは、表6のごとく、つきあいと行事・お祝いが多い。富山県の特徴は、男女ともに、行事・お祝いが全国平均よりも高く、つきあいが低いことである。未成年ですでに酒の洗礼を受けているので、成人以後のつきあい酒が初体験になることが少ないのは当然であろう。

表7 飲酒頻度

	男		女	
	富山	全国	富山	全国
毎日飲む	40.7**	30.4	3.0	2.9
週4～6日飲む	14.0*	11.7	3.2**	1.3
週1～3日飲む	22.5**	26.9	16.0**	6.3
ほとんど飲まない	18.2	19.8	53.7**	35.5
以前飲んだがやめた	1.6**	3.5	2.2	1.3
飲まない	3.0**	7.7	21.9**	52.7
計	100.0	100.0	100.0	100.0

* P<.05

** P<.01

飲酒頻度をみると、表7のごとく、男性では、毎日飲む・週4～6日飲むが高く、週1～3日飲むもの以下が全国平均より低い。すなわち、富山県の男性は、全国平均より飲酒頻度が高い。女性についても、週4～6日飲む、週1～3日飲む、ほとんど飲まないの飲

酒群が全国平均より高く、飲まないが低い。当県の女性も、男性にならって飲酒頻度が全国平均より高い。うるわしい夫唱婦隨の傾向をしめている。

表8 晩 酌

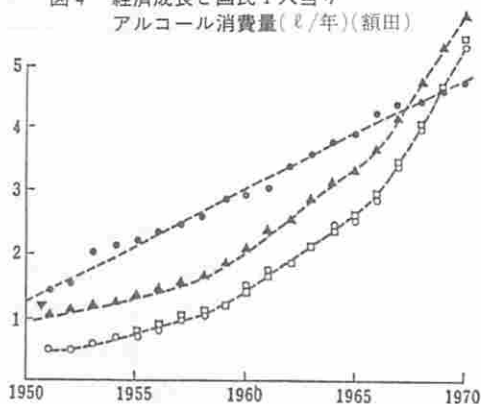
飲酒量	男		女	
	富山	全国	富山	全国
1合以下	32.1 ^{**}	53.3	83.2	79.4
1～2合	48.5 ^{**}	36.1	11.5	13.5
2～3合	16.0 ^{**}	8.1	4.4	4.3
3～4合	2.9 ^{**}	—	0.9	—
4～5合	0.4	—	0.0	—
5合以上	0.1	—	0.0	—
計	100.0	97.5	100.0	97.2

* P < .05

** P < .01

さて、日本人の飲酒習慣は、晩酌という形をとることが多いといわれる。その際の飲酒量をみると、表8のごとく、富山県の男性では、全国平均と比較して、1合以下が少なく、1合を越える量が軒なみに全国より高い。すなわち、富山県の男性は飲酒量が比較的多いといえる。しかし、女性は全国との間に差はない。これも重要な特徴で、飲酒頻度では夫唱婦隨でも、飲酒量は女性が抑えられている。富山県のこの男女の値の差は、封建制の名残

図4 経済成長と国民1人当りアルコール消費量(ℓ/年)(額田)



● 1人当り消費量
▲ 国民総生産GNP(10⁴円)
□ 1人当り国民所得(10万円)
○ 鉱工業生産指数(1955=100)

りともいえよう。

5. ゆとりとストレス

額田によると、アルコールの消費量は国民所得との相関が高いという。戦中戦後の窮乏期に最低をしめたアルコールの消費量は、図4のごとく、高度経済成長とともにうなぎのぼりに上った。

表 9

〈収 入〉		全国順位	指標値	全国値	年
県民所得(1人当)円	12	1,393,063	1,442,113	53	
就 業 率 %	6	51.8	47.1	54	
女性就業率 %	5	43.3	36.7	54	
兼業農家比率 %	1	97.1	86.6	55	

富山県の県民所得は、表9のごとく、全国12位の高さである。とくに顕著なことは、就業率の全国6位と女性就業率の5位である。農家のなかでも、現金収入の確実な兼業農家比率は実に全国第1位である。全国のなかで、富山県民は比較的経済的ゆとりをもっている方だといえる。そのようなゆとりが、冠婚葬祭などのような華やかな飲酒文化や、日常の晩酌量などに表われているのであろう。

人々の飲酒量を増加させるのは、別のファクターもある。人類学者 Horton は、未開民族の研究から次のことを発見した。未開民族が、西欧文化と接触した際のストレスが、過剰な飲酒へとかりたてたという¹⁴⁾。富山県人が未開民族だとはいわないが、富山県は長い歴史のあいだ、中つ国から遠く離れた、越の国すなわち辺境の国であった。明治維新になっても、中央からとり残されてしまった。富山県出身の大臣数が、全国でも最下位に近いと表 10

〈向 上 心〉		全国順位	指標値	全国値	年
高校進学率 %	1	97.6	94.3	56	
国公立大進学率 %	1	12.0	6.0	54	
受験競争必要 %	4	36.2	28.0	53	

いうことはこのせいかも知れない。富山県人は向上心の強い県民といわれる。表10のごとく、高校進学率、国公立大学進学率ともに全国第1位である。受験競争の必要性は第4位をしめす。富山県人が、歴史的に不遇に耐え、先進県に伍していくためには、教育のみが支えであるという悲痛な願いのあらわれともいわれる。¹⁵⁾¹⁶⁾先に述べたNHKの県民意識調査でも、富山県は、「今の世の中で、実力のないものはおいていかれるのはやむを得ないと思う」ものは全国第1位、「競争が激しく、いつも追いかけている気がする」(全国6位)、「実力があっても学歴がなければなかなか社会では認めてくれない」(全国6位)などが、向学心を高めている原因かもしれない。越中人のせつなさがピンピンとひびいてくる。また、「人間にはすぐれた人とそうでない人がいる」(全国1位)と、どうにもならない諦めのムードもあわせもっている。そのようななかで、「富山県人は、能力差を肯定し、競争社会の原理を認めたくて、何事もじっと耐え忍び、自分の利益を追求していく県民性がつちかわれたといわれる。非常にストレスの多い県民であるともいえる。気晴らしに一ばいのみたくなる心境になるのは当然であろう。

6. つきあいの美德

表11 飲酒の理由

	男		女	
	富山	全国	富山	全国
疲れをなおす	33.3	26.3	10.5**	21.4
たのしむ	27.7*	19.7	20.6	21.1
つきあい	21.5*	15.4	42.3**	31.6
よくねるため	7.1**	9.5	4.9**	12.8
食欲をます	3.1**	6.5	1.5**	6.6
元気をだす	3.9	2.9	1.0	3.0
苦痛をやわらげる	1.4**	0.4	0.8	1.0

* P < .05

** P < .01

飲酒理由をみると、表11のごとく、男性では、1位が疲れをなおし、2位がたのしむ、3位がつきあいの順である。女性では順位が逆転して、つきあい、たのしむ、疲れをなおしの順である。つきあいに注目すること、男女ともに、全国平均と比べて異常に高い。

宮城音弥¹⁸⁾は、「日本人の性格」の著書の中で、「けわしい自然ゆえに、日本人は狭い場所で生活する傾向があった。狭い土地のなかで結婚して子孫をふやしてきた。人々は自分の故郷の人間だけを自分の仲間と考え、他の土地の者をよそ者として扱った」と述べている。まさに富山県は、東に名だたる親不知の岬、西には倶利伽羅峠、南には峨々たる立山連峰を、北には日本海の大海岸と、周囲を自然の障壁で囲まれて、わが祖先達の大部分は、長い歴史の間、好むと好まざるとを問わず、限られた地域の中で生活をしなければならなかった。その結果、表12のごとく、現在の富山

表 12

〈集団主義〉				
	全国順位	指標値	全国値	年
生粋県人率 %	8	60.0	41.4	53
人口移動(人口1000人当)				
他府県からの転入 人	45	16.5		56
他府県への転出 人	45	18.3		56
近所つきあい %	3	70.5	58.9	53
老人クラブ加入率 %	1	74.8	50.5	56
婦人団体加入率 %	3	28.9	12.5	55

県の生粋県人率、すなわち親子3代が富山県で生まれ、ずっとそこに住みついているものの割合は60%で、全国平均の41.4%よりずっと高い。2代以下が住みついているものが約30%で、それを合わせると、実に90%となり、他の土地から移住した「旅のもん」はわずか10%に過ぎない。交通の便利になった現在でも、人口移動の統計によると、他府県からの転入者や、逆に転出するものは、いずれも全国順位45位と最下位に近い。もはや、地理的条件のみではなく、長い歴史が心理的にもそうさせてしまったのであろうか。このような

ゲマインシャフト（共同社会）的な地域社会は、近所つきあいを大事にするので、それは全国第3位の高さである。また、同志的結合形式も高く、老人クラブ加入率第1位、婦人団体加入率第3位のように高率である。祖父江¹⁹⁾によると、全国各地に富山県人会があり、全県人同志の団結とたすけあいは全国でももっとも強いという。

わが県人は、宴会の機会を冠婚葬祭や行事にもとめ、そこでの集団飲酒に、人間同志の緊密な触れ合いや、友情や、連帯のきっかけを求めてきた。飲めないものはつきあいのわるい奴であり、みんなは飲めるように努力した。あとでも述べるように、生真面目で勤勉な県人気質は、過度に逸脱する飲酒行動や、ときにはアル中に陥いるのをコントロールしたり、抑制する機能もみられたが、反面では飲めない人間に酒を強いるプレッシャーにもなった。現在、富山県民の飲酒人口や平均飲酒頻度は全国より高いが、アル中者数は全国平均並みという数字が出ている。それは、このようなからくりがあるのであろう。

表 13

〈順応性〉				
	全国順位	指標値	全国値	年
みんなに合わず %	3	78.9	72.7	53
不利なときは黙る %	1	51.3	41.6	53
役所のやることには従う %	6	54.4	45.5	53

しかし、順応性の高い県民ともいわれている。表13のごとく、「自分の考えに合わない点があっても、みんなに合わせる」ので、自分のみたくななくても、誘われればつき合わせるを得ない。「自分の主張すべきことがあっても、自分の立場が不利になるときは黙って」いたり、「国や役所のやることに従っておいた方がよい」と思うので、ストレスがたまる一方である。厚生省が、心の健康をテーマに行った54年保健衛生調査によると、日本人のストレス解消法は、男では「酒をのむ」がもっとも多かった（21.7%）。富山県民が酒に親和

性があるのは、この辺の事情もあるのではなかろうか。

7. 信仰心と飲酒

吉崎²⁰⁾は、「県人は骨身惜しまず働いて、貯蓄に精を出す。なにが一番の目的かという、それは家をもつためである。家を建てたら、つぎは仏壇と墓。唐紙を開けると、どこの家でも一間四方以上の仏壇が鎮座している。墓石にしても、みんな背丈を越す大きさで立派なもので、都会から来たものがみなびっくりする。浄土真宗盛んなりし越中の歴史と伝統が影響している」と述べている。富山県内の神社の数は、2,800社で全国平均の3倍近く、寺院の数が1,730寺で、これは全国平均の2.3倍で、奈良の数に近い。寺院ばかりでなく神社も多いのは、浄土真宗が神道思想を容認したからといわれる。神棚と仏壇が一軒の家に同居している家が珍しくない。富山県の信仰は、「願いごと」というより、「感謝報恩」という意味の方が多いという。願いごとでは、お酒を供えるだけであるが、感謝報恩となれば、大勢の人が集って賑やかに飲むことが多い。飲酒時間や量も多くなろうというものだ。県人の飲み方はこの形式が多いようだ。

8. メランコリー好発性性格

武内²¹⁾は、富山県人をメランコリー好発性性格 Typus melancholicus と考えた。この性格は、几帳面、正直真面目、小心、律気、強い道徳心、仕事好き、強い責任感、完全主義、念入りな仕事、凝り性、時間厳守、業績主義、義理人情重視、人と争えぬ、人と折合いがわるくなると自分の方が折れる、人に頼まれるといやといえぬ、人の評価を気にするなどの特長をもつ。

酒の上の失敗では、表14のごとく、男性では、他人に迷惑をかけた、仕事のミスをしたものが、全国平均より多い。しかし、表15のごとく、富山県民は法を守る従順な県民で

表14 酒の上の失敗

	男		女	
	富山	全国	富山	全国
他人に迷惑をかけた	** 9.6	7.9	1.9	3.8
喧嘩をした	4.8	3.0	0.3	0.0
怪我をした	4.0	4.4	0.6	0.4
仕事上	** 2.6	0.6	0.0	0.4
交通事故	1.3	2.1	0.0	0.8

** P<.01

表 15

〈選法〉	全国順位	指標値	全国値	
			年	年
刑法犯(人口1万人当)件	41	66.1	111.0	54
交通事故(人口10万人当)件	40	304.5	406.7	54
交通事故死傷者数(人口1万人当)人	44	33.4		57

ある。刑法犯件数は41位、交通事故件数や死傷者数はそれぞれ40位と44位で最下位に近い。県人は、それ程でもない迷惑やミス、自分自身では、大変なことをしたように深く考える傾向があるようである。

われわれの先祖達は、立山連峰から流れ落ちる天井川との斗いの連続であった。営々としてつくりあげた幸せを、洪水が一瞬にして奪い去った。サイの河原の石のように、築いても築いてもくずされる苦難と忍従の生活であった。また、越中の支配者は他郷から入り込んで来た。そして折角の作物は藩に収奪された。まさに屈辱と忍従の連続であった¹⁵⁾。きびしい風土とこのような歴史が、県人をメランコリー好発性性格にしたのかも知れない。

9. マイホーム型飲酒

表16 飲酒場所

	男		女	
	富山	全国	富山	全国
自宅	** 72.9	65.1	** 67.7	46.7
のみや	** 19.7	27.8	** 20.1	13.3
友人宅	** 4.4	7.9	** 12.2	40.0

** P<.01

県人の飲酒場所は、表16のごとく、男女とも

自宅が圧倒的に多い。友人宅は非常に少ない。

日本人は、家庭だんらんを生きがいとするものが19%で第1位、子や孫の成長が2位の17%で、家庭への執着が強い国民といわれる。富山県は、その家庭だんらんが25%ととくに高い。県人は、長い歴史のなかで、厳しい自然と苦しい生活の避難場所を家庭に求めた。そこは唯一の安らぎの場であった。また、浄土真宗の「一家一寺」の思想、すなわち家族ぐるみで一つのお寺の檀家となる思想が、家庭中心主義の思想となったという²⁰⁾。一日の激しい仕事を終え、浴衣に着替え、心身をのびやかにさせて、家族だんらんの中で、一ばいやる晩酌は、明日への再生産の糧の意味をもち¹³⁾、謹勉な県民性にも決して反しないのである。

富山県人は骨身惜しまず働いて、貯蓄に努めるという。これは、なんのためかという¹⁶⁾と、昔から、家をもつためであるといわれる。昭和20年代の中ごろに、文化人類学の泉靖一教授が、富山県の子どもに家の絵をかかせたところ、判で押したように大きな蔵つきの家をかいたという。当時の県人の夢は、早く金を貯めて、立派な土蔵を建てることであった。土蔵は過去のものとなったが、家を建てる目標だけは、今の富山県人も変わらないといわれる。わが家の家庭だんらんのうちで飲む晩酌は、わが富山県人にとっては極楽浄土に匹敵しよう。一方、他人の家に迷惑をかけまいといういじらしい心情は、友人宅での飲酒が全国平均以下という数字に表われている。

10. 飲酒からみた合理性

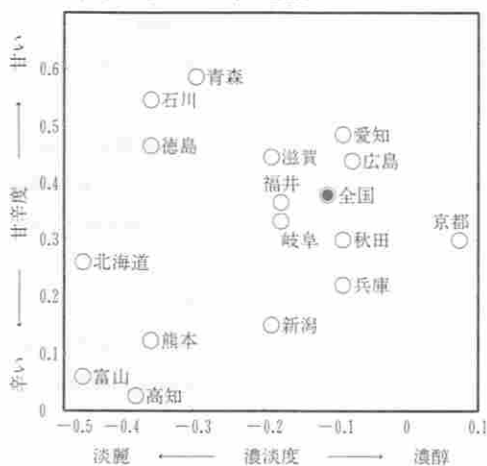
富山県の持ち家率は、表17のように、全国第1位、応接セットは6位、カラーテレビは3位と、資産の所有率が高い。銀行預金も全国第6位と高い。ちなみに、勤労者世帯の例では、実収入が全国10位と高いのに、消費支出は28位と低い。その差額は蓄財にまわるのである¹¹⁾。前述した舎人は、全国のケチ度をし

表 17

〈蓄財〉	全国順位	指標値	全国値	年
持ち家%	1	85.1	61.3	57
応接セット台 (1000世帯当)	6	566.0	431.0	54
カラーテレビ%	3	90.1	75.1	57
銀行預金千円 (1世帯)	6	3,390	3,814	54
勤労者実収入 (1世帯1ヵ月)	10	360,563	326,013	54
勤労者消費支出 (1世帯1ヵ月)	28	223,685	222,438	54

らべ、その第1位を富山県とした。可処分所得に対する消費の割合をしめす消費性向などから割り出した。コツコツと真面目に働き、蓄財して、実利のないものには金を使わないという合理性であるという。それは歴史的に度重なる水害と搾取の両方に責めさいなまれ、くずされてもくずされても、じっと耐えながらさいの河原の石を積んできた忍従の果てにやっとなつた成功の結実——生活の知恵であるといわれる。

図5 県別1級酒の甘辛と濃淡



富山県の清酒は、全国でも指折りの辛口である。県人の志向も、図5のごとく、味も淡麗でさっぱりと、酸の味のうすい酒が好まれるという。米の多い酒は、米から出るものの中にいろいろな味わいのものがたくさん含まれる。これが酒のうま味であり、甘口である。隣の石川県は、当県とは反対に甘口志向であ

る。加賀は百万石で優雅な生活をしている間、富山藩は厳しい自然条件の中で貧苦にあえいでいた。長い忍従と努力の生活の間に、わが富山県人の気質は、いつのまにかメランコリー好発性格となってしまったのであろう。人の気分と嗜好との間にはある相関がある。かくて、わが県人の気質には辛口がピッタリするようになった。石川県とは隣県同志ながらえらい違いとなった。

世界に目を転じると、アルコール濃度の高いものから低いものへ、辛いものからソフトな甘口へと、人々の嗜好が変りつつあるという。それは、人々のアルコール飲料にたいする態度の変化、すなわち酔うための酒からエンジョイするための酒に変わって来つつあるからだといわれる。日本の酒も、年とともに、²²⁾大きなテンポで甘口へと傾きつつあるという。そのなかで、わが富山県は、頑固に辛口志向を続けている。保守的なのであろうか。そのなかには富山県人の合理性は関与していないのであろうか。酒造りの面からいうと、辛口にした方が楽で、コストも安くつくという。²³⁾

県内の酒類販売量は、昭和56年の国税庁統計によれば、人口1人当り年間約54.4ℓで、¹⁷⁾全国23位にあたる。タバコの販売量の¹⁷⁾全国32位よりも高い。当県の酒の売れゆきは、2級よりも、特級や1級の売れゆきが他県に比して高い。それはわが県人が高級品飲酒志向があるからであろうか。「ノー」である。わが県人は、贈答品として清酒の特級や1級を用いることが多いからであるという。自分が平生飲むのは、もちろん2級である。

県人の飲みっぷりをしめす逸話がある。「うちの夫、¹⁶⁾飲むことは飲みますけど、散財って感じじゃありませんね。いつもそんなに財布に入れて出るわけじゃないのに、全部使ってきたことは一度もありません。富山の男性って、江戸っ子とは正反対みたい。宵越しのゼニを必ず残します¹⁶⁾」とは、東京都在住のある主婦の感想である。

富山市桜木町のある一流料亭の女将さんは、「お酒のつきあいも律儀で誠実で、目的意識的にやっておられるようです。宴会につきものの、大とらなどは影をひそめ、かなり合理的な飲み方が浸透しています。きまじめに商談など、宴会の趣旨に合わせて振る舞っておられます²⁴⁾」という。

表18 酒は人生に必要なか

	男		女	
	富山	全国	富山	全国
必要	37.1	36.8	13.7**	8.3
時に必要	55.5**	50.0	68.8**	47.8
不必要	2.6**	8.3	3.8**	28.1
わからない	4.8	4.9	13.7	15.8
計	100.0	100.0	100.0	100.0

** P < .01

私どもの調査によると、「酒は人生に必要なか」という問いに、表18のごとく、富山の男性は92.6%、女性は82.5%の人が、必要あるいは時に必要であると答えている。それは、全国平均のそれぞれ86.8%および56.1%に比べてかなり高い数字である。富山県人は、酒と親和性の高い県民といえるが、その酒との接触のなかに、たくましい合理性もあわせもっているのであろうか。

文 献

- 1) 和歌森太郎：地酒礼讃，柴田書店，1975。
- 2) 和歌森太郎：酒が語る日本史，河出書房，1972。
- 3) 草野 亮，柴美喜子，中川秀幸：富山県の飲酒を考える，富山県農村医学会誌，13：52～62，1982。
- 4) 草野 亮，中川秀幸：富山県民の飲酒実態調査—一般成人男性の場合—，とやま県医報No.848：12～18，1983。
- 5) 草野 亮，山野俊一，中川秀幸，柴美喜子：富山県女性の飲酒状況について，富山県農村医学会誌，14：69～78，1983。
- 6) 額田 繁：アルコール中毒の疫学，加藤伸勝・大原健士郎・河野裕明編：アルコール中毒，18～44，

医学書院，1973。

- 7) 額田 繁：飲酒の生態：西川漢八・額田繁・上野佐編：日本の飲酒を考える，2～17，1975。
- 8) 大橋 薫編：アルコール依存の社会病理，星和書店，1980。
- 9) 佐藤 信：日本人の酒の選び方，西川・額田・上野編，日本の飲酒を考える，医学書院，1975。
- 10) 浅香年木：北陸の風土と歴史，山川出版，1977。
- 11) 舎人栄一：全国比較わが県の実力番付，祥伝社，1980。
- 12) N H K全国県民意識調査：日本人の県民性，N H K放送世論調査所，1979。
- 13) 西川漢八，額田 繁，上野 佐編：日本の飲酒を考える，医学書院，1975。
- 14) ケッセル，ウォールトン，山上龍太郎訳：アルコール中毒，金剛出版，1978。
- 15) 能坂利雄：富山県人，新人物往来社，1977。
- 16) 日刊ゲンダイ編集部：県民性と相性，グリーンアロー出版社，1981。
- 17) 河出書房新社編：県別日本人気質，河出書房新社，1983。
- 18) 宮城音弥：日本人の性格，東京書籍，1977。
- 19) 祖父江孝男：県民性—文化人類学的考察，中央公論社，1979。
- 20) 吉崎四郎：越中人のこころ，富山新聞社，1983。
- 21) 武内 徹：Typus melancholicus の文化人類学的考察—富山県の場合—(その1)，とやま県医報，No.866：6～15，1983。
- 22) 坂口謹一郎：日本の酒，岩波書店，1983。
- 23) とやま酒販情報，No.21，富山酒販協同組合，1981。
- 24) 北日本新聞，シリーズ「越中酒談義」昭和59年1月4日～2月9日付。

その他、ここで用いられた統計的データは、社会統計指標（総理府55.2）、富山県の生活指標（県総務部53.3）、地域経済総覧（東洋経済55.7）、統計からみた富山・100の指標（県総務部56）、民力（朝日新聞社58.6）などから抜粋した。